

大胆な極彩色の模様と  
鮮やかな群青色

埼玉県  
株橋本弥喜智商店  
武州魚

## 手描き・手染め 鯉のぼり&武者絵のぼり

今回で三回目となる「手描き・手染め／鯉のぼり&武者絵のぼり特集」  
は、埼玉・愛媛の二県を訪ね、地域に根ざす伝統の技をご紹介します。

色調を抑えた洗練の  
優美さと重厚感

愛媛県

(資)黒田旗幟店

守和魚鯉

# (株)橋本弥喜智商店

はしもとやきち



埼玉県加須市の(株)橋本弥喜智商店は、明治41年に初代橋本弥喜智氏によって創業。鯉のぼりの生産量を誇る加須市で、今なお手描きの伝統を守り、木綿と顔料だけを使って手描き鯉のぼりを作る唯一の店。昭和53年、埼玉県伝統的手工芸品に指定される。



「鯉のぼりの町」加須市。駅前広場には、年間を通して鯉のぼりが揚げられている

埼玉県加須市は、利根川中流のかつて武州と呼ばれた土地。明治より傘や提灯を作る職人が、材料の手漉き和紙を用いて、鯉のぼりを本業の合間に作り始め発展した。関東大震災以降は、生産を中断した東京の業者が代わって製造を続け、全国的に名を知られ極上品として評判を得るようになった。今日では、全国の鯉のぼり生産の多数を占めている。加須の鯉のぼりは「武州鯉」と呼ばれ、手描きの伝統を育んできた。武州鯉の特徴は、木綿地に手描きの大胆な極彩色模様と基調に使われる鮮やかな群青色にある。

昭和初期の最盛期には、四十軒



初代の原型で作られた「ジャンボ鯉のぼり」航空力学にもかなう設計と検証された

の手描き鯉のぼり店が軒を連ねていたが、化学繊維の登場とプリント技術の進歩によって、様相は一変。手描き職人達は次々とプリントに転向、手描きに徹した店は橋本弥喜智商店一軒となった。町おこしの一助にと青年会議所が中心となり、市の共催を受けて作られた「ジャンボ鯉のぼり」は、同店が構想とデザインを担当。市民総出で四ヶ月を掛けて作り上げた長さ百m、幅二十m、重さ六六六kgの手描きのジャンボ鯉のぼりは、昭和63年から毎年、利根川河川敷に揚げられ、多くの見物客を集め「鯉のぼりの町、加須」の名を広めている。

☎0480-61-0371  
埼玉県加須市土手1-12-12

# 製作工程



製作は10工程を経て完成。  
一匹に約1ヵ月を要する

- 1 断裁・縫製
- 2 目廻し  
目の輪郭を描く
- 3 表描き（筋描き）  
筆で基本となる筋を描く
- 4 うす墨  
表描きしたところに顔料で着色
- 5 こけ出し  
目の回りのこけらを刷毛で塗りつぶす
- 6 ぼかし  
鯉の腹の部分にボカシを入れる
- 7 目の色つけ  
目の回りの色つけ
- 8 群青塗り  
最も濃い色の群青を全体に施す
- 9 金引き  
金色で文様を描く
- 10 黒目入れ  
黒目を入れる



②目廻し  
コンパスで輪郭を描く



③表描き  
黒のラインで下絵を描く。糊を置かず、描いていくのが関東の特徴



④うす墨  
表描き後、刷毛で顔料を塗る（彩色は薄い色から）



⑤こけ出し  
刷毛で色数をたくさん使って塗り重ねていく。目の色を付けてから、群青を施す



⑥ぼかし  
前の色が乾いてから次の色を重ねるので、工程が終わるごとに一晚以上の乾燥させる



⑦目の色つけ  
※乾かす  
最後に墨目を入れ完成

(株)橋本弥喜智商店

代表取締役

橋本隆氏 (三代目)

橋本弥喜智商店三代目の隆氏は、初代の鯉のぼり製作技術を継承。伝統を守りながらも、時代のニーズにあったデザインを追求し続け、顔料の開発や絵柄の工夫などに努めている。

「先代が亡くなり、後を継いだのが二十五歳の時。そのころから、ナイロンプリントの鯉のぼりが始め、手描きの鯉のぼりが売れなくなりました。

手描きは、一つとして同じものがなく、型にはまらない表現が楽しく、売れない時代も、プリントの鯉のぼりを作りながら手描きも続けていたんです。ですが、いずれ無くなってしまう



昭和9年、天皇陛下に鯉のぼりを献上

ものかとも思い、せめて博物館に資料として残してもらいたいと、寄贈できるような立派なもの職人全員で製作したりもしていたんですよ(笑)。

それがある日、新聞に取り上げられ、製作が追いつかないほど注文が来るようになったんです。それからは、手描き一本です。

節句用品の製作は、家族や人間関係の心の問題に関わる仕事です。みなさんに喜ばれるものづくりを行い、社会のお役に立てればと思っています。

夢は東京タワーに、大きな鯉のぼりを掲げることです(笑)。アナログの伝統工芸品のよさをアピールしていきたいです」。

## 製作道具

金引きで使う自作の筆は三本の面相筆を組み合わせたもの&先代から愛用の刷毛(右)



色落ちしない色止め剤を配合した水性顔料を用いている。顔料は染料より鮮やかな発色となる



# (資)黒田旗幟店



愛媛県宇和島市の黒田旗幟店は、明治37年に創業。宇和島独自の染めを用いた伝統の製法で鯉のぼりや武者絵のぼり、大漁旗などを手掛けている。四代目の双子の兄弟が創業以来百年余りの伝統技法を受け継ぎ、手染めならではの色合いや重厚感で高い評価を受けている。平成14年、愛媛県の伝統的工芸品に指定。



景気のよい時は、風の抵抗で走れないほど、船にたくさんの旗を付けた

宇和島伊達家十万石の城下町の歴史を伝える愛媛県宇和島市。リクス式海岸が続く宇和海沿岸は、日本有数の漁業に適した立地条件に恵まれ、伊達家の漁場として発展。伊達家の長印ののぼりを立てた漁が行われ、のぼり、大漁旗などのほか鯉のぼりや武者絵のぼりなども製作され、独自の染色技術が開発されていった。

現在も漁業は、宇和島の基幹産業であり、鮮魚運搬船の保有高が全国一の漁業町。春の進水式には、豊漁を願う大漁旗が盛んに用いられたが、漁業不振などで需要は次第に減少し、今日、市内で手



宇和島は闘牛の「牛鬼まつり」でも有名



斜の竹ざおに揚げられた鯉のぼりは、風をはらんでよく泳ぐ

染めを行っているのは黒田旗幟店一軒となった。

宇和島の鯉のぼりは、実際の鯉の形に近く、どっしりとした形で、金巾と呼ばれる河内木綿に下絵を描き、大豆粉を搾った豆汁でねずみ色に着色。柿渋と油煙とアルコールを混ぜた渋墨で鱗を描く伝統的な技法による独特の風合いが特徴。

愛媛県宇和島市栄港町1  
☎0895-22-1317

## 製作工程

### 1 断裁・縫製

### 2 下絵

下図の上に布を敷き、線に合わせ糊を置き下絵に

### 3 下染め

下絵の上から色付け

### 4 墨さし

ウロコを一枚ずつ刷毛でボカシながら墨を入れる

### 5 色止め

豆汁を塗っていく

### 6 水につける

乾かしてから、一昼夜水に浸けて糊を落とす

### 7 仕立てる



7つの工程により、一匹完成まで約3週間を要する。お腹のみかん色が特徴



③下染め 下絵の上から豆汁（大豆の粉）と染料で色付け



②下絵 糊で下絵を描き、糊が流れないように糠（ぬか）をかける



⑤色止め 豆汁を塗る（たんぱく質の膜を作り色止めに）



④墨さし ウロコを刷毛でボカシながら柿渋で溶いた墨で染色



※乾かす 工程ごとに天日で乾かす。日光の当たり方で発色が変わるので、雨の日は休み



⑦仕立てる 乾かした四枚の布を縫い合わせ、口輪を付けて完成



⑥水につける 一昼夜、水につけ翌朝、糊を落とす

(資)黒田旗幟店

黒田勉(健氏(四代目))

手染めの製法で鯉のぼりや武者絵のぼり、大漁旗を手掛ける黒田旗幟店は、勉・健氏の双子の兄弟が伝統を引き継ぎともに「えひめ伝統工芸士」。宇和島独特の染料を用いた製作技術を継承している。

「宇和島は、真珠の養殖や漁業が盛んな海の町です。景気の良い時は、大漁旗の注文がたくさんあり、とても忙しいですね。今後は、のれんなどの染めものにも力を入れていきたいですし、一般の人にも染めを体験で



手染め武者絵のぼりも製作

きるような場所をつくってきたいです。最近では、現代美術作家の大竹伸朗氏とコラボレートしたり、愛媛県美術館で体験教室なども行ったりしています。宇和島の染めものをアピールしていきたいですね」と勉さん。また、健さんは「今、息子に鯉のぼりの製作を教えているところですが、技術の伝承には時間がかかりますね。なかなか難しいですが、なんとか一人前になってもらいたいと思っています。せっかくの伝統技術が無くなってしまわないように、後継者育成も行っていかなくてはならないですね」と語った。

製作道具



◀もち米と塩で作った糊



▶染料の墨には柿渋を混ぜ合わせ使用



糊でラインを引く筒(上) & 染料各種



布を竹製の伸子張りで張る

